

『源氏物語』の女房たち

博士後期課程一年 千野裕子

『源氏物語』において女房名には意味がある。同じ女房名ならば別人であっても似た人物造形になっていることがあるからだ。その特徴が顕著な女房名に「右近」と「侍従」があり、両者がとも仕えているのが浮舟である。このことから、浮舟物語が正篇とどのように向き合っているかを考察した。

「右近」は正篇に一人、続篇に二人登場する。浮舟づきの右近以前に登場する「右近」の共通した特徴として、堅実に仕える、乳母子あるいはそれに準ずるような側近女房という点が挙げられる。一方の「侍従」は正篇に四人、続篇に二人登場する。浮舟づきの侍従以前に登場する「侍従」に共通した特徴として、乳母子であり、若く、思慮が浅く、恋の場面に登場するが時に主人に反する行動を取るといった点が挙げられる。

このように対照的な特徴を持つ「右近」と「侍従」が共に仕えているのが浮舟である。二人とも浮舟の最側近の女房であるかのようにながれ、その役割は重大である。浮舟巻では、堅実によく仕える女房である「右近」が、浮舟を思うあまりに判断を誤り、結果的に浮舟を追い詰める。一方、若く思慮が浅く必ずしも主人の思うようには動かない「侍従」が、一貫して自身の欲望のままに勾宮を勧

め続ける。浮舟物語は、「右近」「侍従」という女房の造形を利用して浮舟を追い詰めていったのだ。

しかし、「右近」と「侍従」は正篇からの造形を継承した女房たちというだけではない。正篇の「右近」や「侍従」に似せていながら、実は大きく違う設定の上にあったということが、浮舟失踪後の蜻蛉巻で示されている。

正篇に登場した「侍従」が全て乳母子だったのに対して、物語は蜻蛉巻に至って、実は浮舟づきの侍従が「よそ人」であったと明かす。物語は侍従を「よそ人」として設定しながら、正篇からの造形を利用して、いかにも側近の女房であり、正篇の「侍従」たちと同じであるかのように見せかけていたのだ。

しかも、明石中宮に出仕した侍従は下臈の女房とされている。浮舟は八の宮に認知されずに受領の娘として育ったため、そこに仕えていた侍従は、明石中宮のもとに出れば所詮は「下臈」の女房なのだ。侍従は勾宮との取次をしていたことで京に迎えられたのであり、本来ならそれが可能な身ではなかった。だとすれば宇治に残る右近も同様のはずである。つまり、「侍従・右近」と名のつくふたりの女房だが、身分という点からも正篇の「侍従」や「右近」と大きく違うということが蜻蛉巻で明確に示されている。

正篇から積み上げてきた「右近」像・「侍従」像を利用し、この二人を機能させることによって浮舟物語は動かされたが、宇治を離れ、再び都の世界が語られる蜻蛉巻の世界では、浮舟物語が実はいかに正篇世界から遠いものであったかが位置づけ直されている。

「右近」や「侍従」といった女房たちからは、浮舟物語がいかに正篇を利用しているか的一端が示されているのである。